

編集部便り

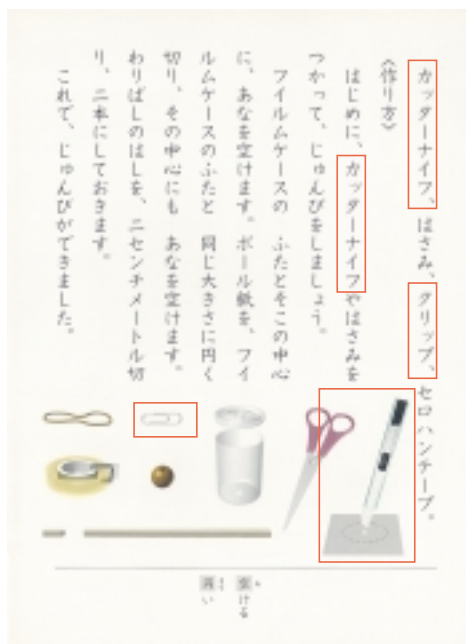


「うごくおもちゃを作る」
(二年下)の訂正について

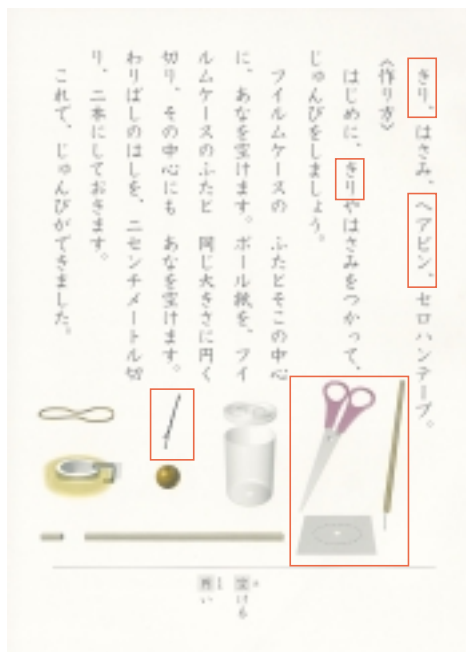
平成十五年度用二年(下)「赤
とんぼ」所収「うごくおもちゃを
作る」につきまして、次のように、

本文の言葉と挿絵を訂正いたしました。これは、本教材

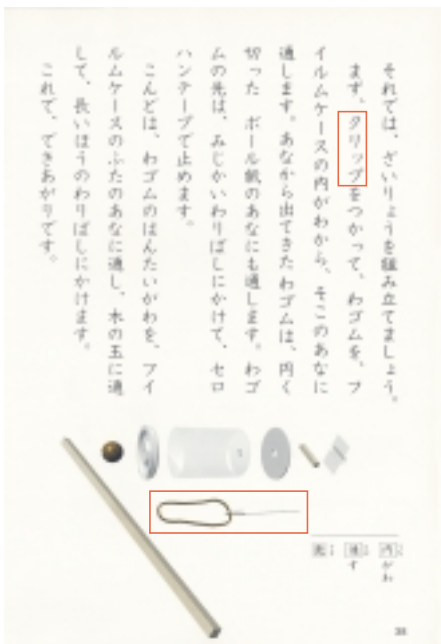
の中が訂正されています。



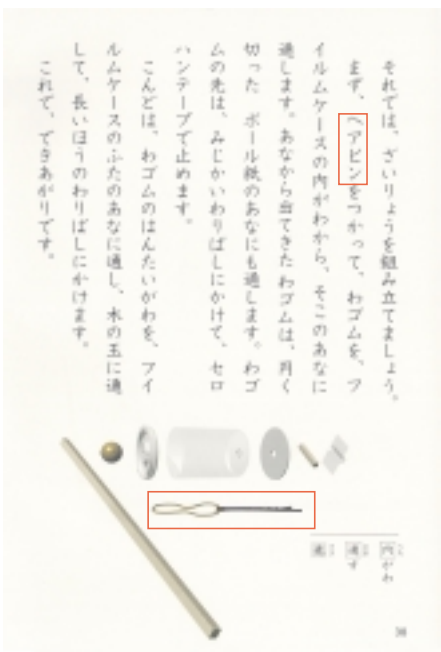
14年度版 37ページ



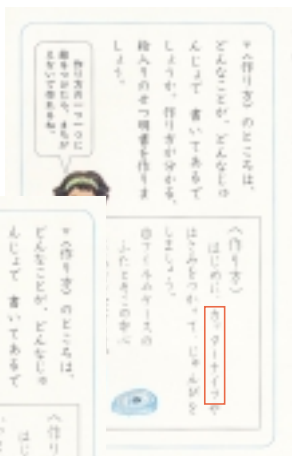
15年度版 37ページ



14年度版 38ページ



15年度版 38ページ



14年度版 41ページ



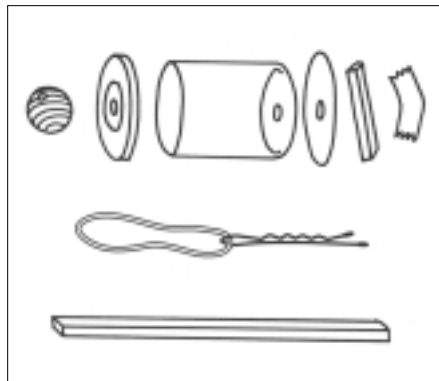
15年度版 41ページ

を「実践いただいた結果寄せられた、短時間で安全に工
作ができることが望ましい」というご意見をもとに、文部
科学省に訂正を申請し、許可されたものです。
児童に配本される教科書は訂正済みのものとなります
が、先生方がお持ちの指導書などとは相違が生じます
ご迷惑をおかけして申し訳ございませんが、指導の際、
ご配慮いただきますようお願い申し上げます。

1 フィルムケースが手に入りくい場合は、市販されて
いる乳酸菌飲料のプラスチック容器で代用することもできま
す。その場合は、ボール紙の大きさを、容器の口と同じ大き
さに切るようにします。輪ゴムは、容器の外側から通したほうが
組み立てやすいでしょう。まず、輪ゴムの先を長いほうの割り
箸にかけます。次にヘアピンを使って、
輪ゴムの反対側を木の玉に通して、容
器の外側から底の穴に通します。穴か
ら出てきた輪ゴムは、ボール紙の穴に
も通します。そして輪ゴムの先を、短
い割り箸にかけて、セロハンテープで
止めます。



訂正にともない、学習指導書とセットになっているワークシート集の132ページにも、変更が必要となります。次のカットをワークシート的一部分に代用していただければと思います。



標を達成するための読む教材であり、その動くおもちゃの例として、フィルムケースや割り箸と輪ゴムを使ったおもちゃを取り上げているものである。学習の目標は、事柄の順序を考えて読む力を身につけることであり、動くおもちゃを実際に行うことは、その読み取りを確実にしたり、読み取ったことを評価したりするための補助的手段である。ところが、児童は動くおもちゃを作ることのほうに興味をもって夢中になったり、教師もそれに気を取られて工作活動に時間をかけすぎたりすることがままあり、それでは本来の趣旨と違うので、この点は十分注意して指導したい。

この単元の授業をして、実際に動くおもちゃを作るとき、「カッターナイフ」より「きり」のほうが穴が空けやすい、「クリップ」を延ばして使うより、「ヘアピン」のほうが輪ゴムを通しやすいという意見が出された。実際に試みたところ確かにそのほうが簡便だという結果になったので、教材文の一部を変更したものである。つまり、順序を考えて読み取る力を育てるという国語科本来の目標を達成するために、補助的手段としての動くおもちゃ作りをより簡便にするための一つの手立てを取ったものである。おもちゃ作りを簡便にするためには、このほかにも例えば、必要に応じて教師が工作の手助けをし

国語科における教材の意味を考える

元台東区立育英小学校校長 藤井 治 ふじい おさむ

平成十五年度用二年（下）「赤とんぼ」第三単元「読んで、作って、たしかめよう」の教材「うごくおもちゃを作る」について、おもちゃを作るのに使う道具を二点変更した。「カッターナイフ」を「きり」に、「クリップ」を「ヘアピン」にということである。これは、教材観を変更したとか、間違いを正したということではないので、それに関して少々述べておきたい。

この単元のねらいは、「読むこと」と「書くこと」を関連させて、事柄の順序を考えて読んだり書いたりする、第二学年の最も重要な目標の一つを達成しようとするものである。学習指導要領との関連でいえば、一つは、「読むことイ」にかかわって「動くおもちゃの作り方、遊び方について、順序などを考えて読み、実際に作って確かめる」という目標である。もう一つは、「書くことイ、エ」にかかわって、「自分で考えた動くおもちゃの作り方、遊び方を説明する文章を、事柄の順序を考えて書く」が目標となる。

教材文「うごくおもちゃを作る」は、右の一つめの目てやってもいいし、児童の読む力が身につについて、実際に動くおもちゃ作りをしなくても事柄の順序を押さえた読み取りの学習ができるならば、これを省いてもいいわけである。

ここで取り上げた「うごくおもちゃ」の例は、昔でいえば木製の糸巻きや割り箸と輪ゴムで作った「糸巻き車」であり、当時の子どもはだれもが遊びの中で経験していたものである。その糸巻きが家庭から失われたので、ここではフィルムケースを利用して同じ仕組みの動くおもちゃを教材化したわけである。ところが最近、写真もデジタルカメラのほうが多くなって、このフィルムケースも家庭から失われつつあるという。時代の移り変わりは速いといべきか、恐るべきことである。フィルムケースがないという子のために、学校とかかわりのある写真屋さんにおいて、フィルムケースを取っておいてもらうことも必要になるかも知れない。

今日、わが国のロボット技術が国際的にみてトップを走っている源には、伝統の「からくり人形」の技術があるといわれる。さらにその根源として、子どもの時代からの動くおもちゃの遊びがあると私は考えたいが、どうであろうか。